

男性健常者および高血圧患者の食塩味覚閾値に影響を及ぼす因子について
 日本女大家政 ○丸山千寿子 天海紀代美 松沢美帆 東千恵美
 奥脇泉 吉見千代子 村上智子

<目的> 昨年度の本学会において、男性における健常者および高血圧患者の食塩味覚閾値は、20～44歳に比べて、45歳以上の群で高いことを報告した。そこで、今回は、同一対象集団における年齢と味覚に影響を及ぼす因子について検討することを目的とした。
 <方法> 1989年5月、都内某大手商社の定期健康診断時に、21～69歳の男性社員1511名を対象として、食塩味覚閾値判定濾紙を用いて味覚検査を行い、同時に食生活その他に関する16項目にわたる調査を実施した〔有効回答数1384(91.6%)〕。このうち、味覚検査時に、疾患を持たず、体調が良く、薬等を服用していなかった健常者519名と、定期健康診断において高血圧のみを有すると判定された87名について、以下の検討を行った。

<結果> 食塩味覚閾値は、健常者群20～44歳(461名) 0.82 ± 0.37 、45～69歳(58名) 0.98 ± 0.44 、高血圧群20～44歳(44名) 0.83 ± 0.40 、45～69歳(43名) 1.02 ± 0.43 で、45～69歳の食塩味覚閾値が高か、た(健常者群 $p < 0.01$ 、高血圧群 $p < 0.05$)。減塩実施意識の有無別、味噌汁などの汁物と漬物等の摂取頻度別にみた食塩味覚閾値には差がみられなかつた。醤油やソースをかける料理または加工食品の数が多い者は、健常者群、高血圧群とも45～69歳で、食塩味覚閾値が高い傾向にあった。アルコールを30g以上/日摂取する者は、0～30g/日の者に比べて健常者群の45～69歳で有意に高い味覚閾値を認めた($p < 0.05$)が、高血圧群では差がなかつた。